

Hちゃんの笑い

—— 保育随想 ——

本田 和子

Hは笑う 子どもたちに追いかけられて

Hは笑う 好きな友だちを追いかけて

Hの笑顔 それは 笑いが純粹に花開いた姿

哲学者たちが 様々に論じた

あらゆる笑いの理論を超えて

そこには 人間の笑いの原点がある

創造の営みの中で、

神が 人間に笑いを与え給うた日を

私どもは いま

感謝をこめて想うことが出来る

Hは笑う 顔一杯に

Hは笑う 体一杯で

Hの顔に笑いがある限り

この幼稚園の存在は不動であり

この保育の価値は 微動だもしない

ある幼稚園を見学したとき、私の観察ノートの一隅に、こんな言葉が書き連ねられた。詩などと言うものではない。一種の印象記録、一人の観察者として、「見たことのあかし」を、こんなスタイルで書き記した、と言うことであろうか。

Hは、いわゆる「障害児」と呼ばれる子どもであった。テストの示すところでは、精神年齢二歳教か月、殆んど言葉を用いることがないと言う。保育者の指示や働きかけは、わかるような、わからぬような、何となく子どもたちの間にいて、何となくフラフラしている、そんな子どもに見えた。

私の視野に、Hが鮮明な形で飛びこんできたのは、十時を少し過ぎた頃、すなわち、園内の子どもの遊びが、佳境に達した頃であった。私は、日ざかりの園庭に発生した大規模な水路作りに見入っていた。と、掘り進められた溝に、もっと水を流そうと、バケツを取りに駆けて行った一人の男児が、廊下の入り口で、危うく鉢合わせしかけたのが、Hであった。そのとき、Hの顔に、「パーッ」と笑いが広がった。そして、彼女は、そのまま、トコトコと逃げ出したのである。面白いことに、その男の子は、

笑い声を立てながら、Hを追いかけ始めた。体全体に笑いをさざ波だてながら、逃げるHと追う男の子。そんな関係が、突然、なぜ、ここで発生したのか、第三者的に位置する私には、わかりきれない。然し、二人にとって、それが大変面白く楽しい関係であり、とりわけ、Hにとっては、純粹に、笑いの湧き起こる体験であることだけは、疑う余地がなかった。

一時、逃走と追跡が続いた後に、ふと、関係が逆転した。追いかけていた男の子が身をひるがえして逃げ始めたのである。と、それに気付いたHは、体一杯の笑いを一きわ深くして、今度は、追いかける側に回った。トコトコと幼い足で追うH、時々ふり返っては、その間隔が広がり過ぎぬよう調整しながら逃げる男児。園庭一杯に広がったカラフルな子どもたちの群の中から、くつきりと、その二人の図柄が切り取られて、私の視界に、鮮明なしるしを刻み続けた。

Hの笑いは、そして笑いを共有する二人の関係は、まさに純粹な喜びの元型である。笑いという現象を説明しようとして、優越の理論、或いはコントラストの理論など、様々に考察が試みられている。然し、Hの笑いは、と言うより笑うHは、と言うべきであらうか、優越感のとりこになっっているのでもないし、対比の妙

に興じているのではない。ただひたすら体の底から溢れてくる笑いで顔や手足をほころばせているのだ。そして、その笑いの泉は、他者と共にある喜び以外の何ものでもない。人と人が出会って、それが喜びであるような関係であるとき、人は、ひたすら、ただ笑うのであろう。そして、Hは、未だ赤ん坊の無垢の体現者でもあるがゆえに、その喜びをより直截に追い求めて、駆け出したのであった。Hがトコトコと逃げ走ったのは、「笑いの終了」、つまり瞬間に出会った二人の関係が終り、別々の他者に戻ることからの逃走だったのかも知れない。

いずれにしろ、私はここで、「人間が笑いを持っている」ということの意味を、改めてかみしめる機会を持たされた想いであった。



エリナー・ファージョンの作品の一つに、『海の赤んぼう^{*1}』という短篇がある。年とったばあやが、世話をしている末っ子のメアリ・マチルダに向けたお話という形をとったこの物語は、ばあやが少女だった日に、ただ一度の出会いは持った「永遠の赤んぼう」の、「永遠の笑い」について語っている。

ノーフォークの海辺に育った少女は、激しい嵐の去ったある夕方、常でない引き潮に誘われて、伝承の村を訪れる機会を持った。というのは、少女たちの間に、この海の先には、ノアの大洪水以来一つの村が沈んでいままも時折教会の鐘が聞こえてくる、という言い伝えが信じられていたのであった。潮の引いた砂浜を、金色に輝く砂粒をふんで、少女は駆けつけ駆ける。そして、砂浜のずつとずつと先に、金色のかたまりのような、輝く小さな村を見出したのであった。そこでは、かつての日さながらに、庭には花が咲き、木々には果実がみのっている、暖炉のやかんは湯気をたてているけれど、村人たちはすべて、深い眠りの中にある。そう、さながら、時間の流れをせき止めて、忘却から村を救おうとも言うのかのように、人々は、老いることも死ぬこともない眠りの中に身を浸して、誰一人、立ち上るうとしない。

そんな中で、少女は、たった一人だけ、パッチリと目を開いた存在に出会う。それは、海のように青い目と、海の泡のように白い歯と、夕日を浴びた砂のように金色の髪を持った女の赤ん坊であった。しかも、赤ん坊は、少女を見ると、全身に笑いをみなぎらせてゆりかごの中に立ち上り、思わず両手を差し延べた少女の胸にびたつと抱きついてきた。そして、この赤ん坊、皆川美恵子さんが作品論の中で、「ひまぎさまな海の姿で形容され」、^{*2}「海の世

界と陸の世界との不思議なつながり」を象徴する「海の赤ちゃん」と解説した嬰兒は、少女の胸に抱かれて、「くっく」とあどけない笑い声をたてるのだった。

少女は、もう、赤ん坊から離れることが出来ない。再び満ちてきた潮に追われて、村に逃げ帰った少女の腕には、海の赤ん坊が、しっかりと抱かれていた。こうして、赤ん坊と少女との不思議な共存が始まる。この赤ん坊は、夜になっても眠らず、ミルクも飲まず、ただひたすら、少女に笑いかけてくる。「いい子ちゃん、目をつぶるの」と呼びかけても、子守唄を歌ってやっても、赤ん坊は笑うだけ、「あんた、いけない赤ん坊だね」と叱ってみても、赤ん坊は、ますます嬉しげに笑い続ける。そして、遂には、少女も笑い出してしまおうという、そんな一週間が続いたのであった。然し、七日めの夜のこと、月あかりの大地の中を白い雲のように泳いで来た女の人に抱かれて、海の赤ん坊は、少女の許を去った。その女が歌う「ねんねんよう、ねんねんよう」という歌声。それは砂の上に寄せる波のように静かで、いつの間にか、少女も深い眠りの中に誘い込まれてしまった。そして、目覚めた少女の傍に、その赤ん坊は、再び現われてはこない。

こうして、少女と海の赤ん坊との束の間の共存は終わった。然し、あの赤ん坊の笑い、ひたすら笑い続け、笑うことによつて

「生きてあること」を証したこの赤ん坊の存在は、少女にとって永遠のものとなった。再び、皆川さんの表現を借りるなら、「海の赤ちゃんとの出会いとわかれが、少女の、ばあやとしての一生を導き、」その少女を、「お話の上手な、子どもの心がよくわかる、どんな不思議なことでも信じられる人間」として、成長させたのであった。

このばあやは、皆川さんの指摘どおりに、作者であるファージョン自身であるかも知れない。そして、海の赤ん坊は、ファージョンが、その肉の腕に抱くことのなかった、但し、心の奥底に深く抱き続けた元型としての赤ん坊ではなかったろうか。内なる赤ん坊と、その全身に波立つ笑い、その笑いの波動のゆえに、ファージョンの生涯は常にみずみずしかったのであろうし、彼女の生の炎は、常に黄金色に燃え続けたのであろう。終生を一人で生きた彼女は、恐らくは、孤独ではなかったに相違ない。共にある喜びを、笑いよつて証する「永遠の赤ん坊」を、いつも抱き続けていたのだから。



赤ん坊が笑い続けたとき、少女も笑わずにいらなかった。こ

ここでは、「なぜ、笑うか」という問いは、不要である。二人は、ただ、「共にある」から、「共にある喜び」を笑うのである。

Hの全身を波立たせる笑い、そしてそれを受けとめた男児の笑いは、まさに「共にあること」の喜びであった。「ちえおくれ」と呼ばれ、言語的思考の世界を充分には持ち得ないかも知れないとされるHの笑いは、それだけに純粋で元型さながらであろう。それゆえに、その笑いを追いかけるHの姿は、笑う人間の原点を示すのだ。

Hが、こうして、「友人たちの中に共に生きる日々」を喜び、生存の意義を全身で体験しているとしたら、私には、それだけで、この幼稚園の存在と、今日の保育の価値は、不動に思える。Hと、そしてあの男児を、ああやって笑わせた時間の流れは、そしてそれを培ってきた日々繰り返しは、恐らくは、他の子どもたちにとっても、意味深いものであったに相違ないのである。

たった一人の例から、すべてを推測するとは、余りにも科学性に欠ける行為だろうか。一匹の迷い羊を求めて、道をひき返した羊飼いの話が、聖書にある。それに対して、他の九十九匹の羊の安全をこそ考えるべきであろうという、合理主義者たちの批判が、注がれることがある。然し、言うまでもなく、この譬は、一

対九十九という数量的な対比が可能であるような次元に、位置してはいない。ただ一人をも失うことのない羊飼いでなければ、よき牧人とは言い得ず、仔羊たちを安全に守り導くことは不可能なのだ。

仮りに、教育効果の測定が数量的に試みられたとして、八〇パーセントの子どもが、八〇パーセントの満足を得ていると言う結果が、導き出されたとき、自身のありようを是とすることの出来る教育者がいるだろうか。満たされぬ二〇パーセントを追って、教育者の日々は安らかではないだろう。

教育の意味は、数量の次元を超えている。そして、その効果もまた、必ずしも、数量の次元のみのことからではない。多くの子どもたちを、ほとんどに過ごさせる毎日にもまして、ただ一人を、但し、充分に、燃焼させ充足させる瞬間にこそ、生命をかけるべきなのではないか。

私のこんな想いをよそに、走り疲れたHは、汗ばんだ顔を抑向けて、青ぎりの若葉のそよぎに、しばし、目を奪われていた。

* 1 E・ファージョン、石井桃子訳『ととったばあやのお話かご』
岩波書店 一九七〇・七

* 2 皆川美恵子「海の赤んぼうと私」『子どもの館』51号
福音館書店 一九七七・八